

連載

6

在宅医療奮闘記

平成7年より
在宅を開始した

私の思い出

(医)東西会 千舟町クリニック院長

橋本 満義 (62歳・内科)

『看取り』の仕方



平成10年春頃、一本の電話がありました。往診の依頼です。

84歳の女性でがんセンターに入院中との事。胃がんで肝転移がみられ、抗がん剤治療をすすめられていましたが、余命は短いとの事でした。本人とご家族は、治療の副作用による苦痛を好まず自宅療養を希望したところ、主治医が自宅での緩和ケアを了承されました。優しく立派な先生であったようです。鎮痛治療と静脈注射1本を希望され、毎日訪問する事となりました。

現在と異なり当時は、末期がんであってもボランティアの在宅治療が必要でした。最期にご家族の「本当にありがとう

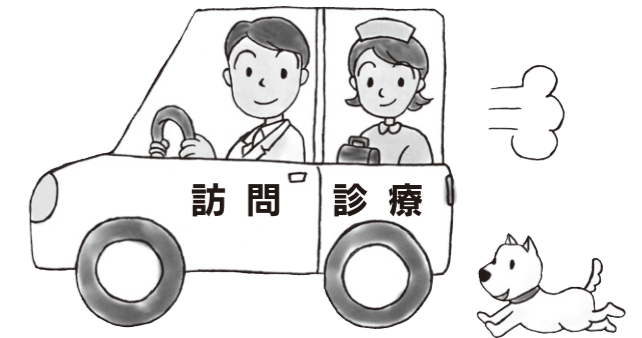
ございました」の一言をいただくと、大変やりがいのある仕事だなあと我々スタッフ一同とても充実した気持ちになったものです。また、医療技術だけでは不十分で、患者さんの将来の不安を取り除いてあげられるような、あらゆる対応が必要でした。

現在、患者さんの人生最期の『看取り』のかたちは、患者さん本人(または後見人)が病院、施設、自宅のいずれかを決める事になっています。これがノーマライゼーションです。

そして、私たちも患者さんからいろいろな影響を受けることになりました。やがて私の死生観は『身土不二』となったのです。

「お医者さんが来てくれる」

質の高い在宅医療・看護・介護を『千舟町クリニック』は目指しています。



機能強化型・有床 在宅療養支援診療所

(医)東西会 千舟町クリニック

松山市千舟町6-4-9 Tel:089-933-3788

<http://www.touzaikai.jp/>